



巻 頭 エッセイ

ピーターの勧める 外国語習得法

ピーター・フランクル Peter Frankl

僕の外国語の勉強方法を大きく変えた出来事は、高校1年生のときに起きた。ドイツ語の先生がみんなに「ドイツ語で独り言を言ってみなさい」と勧めたのだ。家にいるときや学校への行き帰りなど、特別にすることがないときに、簡単な単語や文章で「天気がいいです。たくさんの方がいます。僕は道を歩いて学校へ向かっています。」などと、頭の中で試してみるように。早速これを実行に移した。それから、他の外国語を学ぶときにも、できるだけこの方法を実践するようにしている。外国語での独り言を続けていると、その言語でも自分のレベルに合わせてものごとを考えられるようになる。ただし、今でもよく「何語でものを考えていますか？」と聞かれるが、状況によって違う言語で考えているので、一概には言えない。ある言語で考えるということはただの習慣で、言語の上達度を示すものではない。さらにこの方法のいいところは、頭の中でいろいろな表現を何回も使っているので、いつか実践で使いたいという気持ちが湧いてくることだ。その機会が訪れたとき、緊張して間違えたら恥ずかしいという気持ちよりも、とにかく言ってみようという気持ちのほうが強くなる。

恥ずかしいという気持ちに関して言えば、戦後アメリカ人のベネディクトが著書『菊と刀』で日本は恥の文化だと述べているように、日本人にはその気持ちがとて強い。でも、外国人と話をするときには、絶対忘れなくてはならない。大切なのは外国語のレベルではなく話の内容なので、硬くならずに気持ちを素直に伝えるようどんどん言葉を口にしてほしい。間違えることは、ある意味その言語が母語でな

い人の特権である。しかも、その間違いが相手に快感を与えることもある。日本語がまだ下手だったとき、周囲の日本人はそれを面白がって聞いてくれた。道で見かける外国人の大道芸人は、片言の日本語で笑いを取っている。

僕は何ヶ国語も勉強したが、これを通して旅先でかなり得をした。外国に行くとき、その国の「こんにちは・ありがとう」などの簡単な挨拶を覚える人が多いが、それよりちょっと踏み込んだ面白い表現を覚えるとよい。フィリピンに行くとき、タガログ語をちょっと勉強して「僕はタガログ語を話せません」という表現を、ほぼ完璧な発音で覚えていった。矛盾しているから笑いが取れて、現地の人と親しくなることができた。インドネシアを訪れたときは、難しい意味のスサーと牛乳の意味のスーの発音がよく似ているのを知った。そこで、大道芸を披露しているとき、わざと「この芸はスーです」と言って観客が不思議な顔を見ると、あたかもその時初めて気付いたかのように「ごめんなさい、スサーでした」と言い、大爆笑が起きた。ちょっと難しい単語を覚えて披露して笑いがあると、初対面の人同士のコミュニケーションの一番よい触媒になる。

コミュニケーションは試験ではない。肩の力を抜いて、お互いにいい時間を一緒に過ごしてほしい。

ピーター・フランクル

ハンガリー出身。数学者、大道芸人。より多くの人とコミュニケーションを取るために習得していった外国語の数は11におよぶ。研究、講演、大道芸などに忙しい日々を送っている。著書に『頭の良くなる英語』（三省堂）など多数。